日本聖公会婦人会　2020 年 2 月 28 日発行

ニュースレター　No. 70

〒545-0053 大阪市阿倍野区松崎町 2-1-8 大阪教区事務所内
TEL 06-6621-2179 FAX 06-6621-3097

「 どんな枝を張るのでしょうか。 」

日本聖公会婦人会 担当主教
主教 アンデレ 磯 晴久（大阪教区）

イエスは言われた。「神の国は何にたとえようか。どのようなたとえで示そうか。それはからし種のようなものである。土に蒔くときには、地上のどんな種よりも小さいが、蒔くと成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張る。」マルコ4:30～32

主が皆さんと共におられますように。

昨年運命の 6 月 13 日、日本聖公会婦人会総会において、次期担当教区を選出する選挙が行われ、大阪教区が選ばれました。お引き受けするなら今しかないと思いつつも、えらいことになったというのが内心正直なところでした。皆様のお祈りをよろしくお願いします。さて、この原稿を書こうとしたとき、私の心に浮かんだのが、聖歌 344 番でした。

空の鳥は　ちいさくとも　お守りなさる　神さま
わたしたちは　小さくとも　御恵みなさる　神さま
悪いことは　小さくとも　お嫌いなさる　神さま
愛の業は　小さくとも　喜びなさる　神さま（聖歌344番）

皆様、よくご存じの聖歌です。主イエスは、小さなものが大好きでした。からし種、空の鳥、野の花、当時の社会の中で小さな存在とされていたこどもたちや女性たち、差別されていた人々に目を注ぎ、小さくされた人々の中に尊い命と可能性を見出し、大切にされました。愛の業はどんなに小さくても、大喜びなさる方が主イエスでした。その主イエスのお心に触れて、歩んできたのが、日本聖公会婦人会です。そして大阪教区の婦人会です。この度、日本聖公会婦人会担当教区に神さまは、大阪教区をお選びになりました。きっと主イエスが、小さな器である大阪教区婦人会が大好きだからでしょう。

大きなことはできないと思いますが、身の丈にあった働きを、こつこつと積み重ねたいと思います。私は主イエスが一緒ですので、向こう側（神さまの方）から、ビジョンが与えられてくると信じています。からし種は、土に蒔く時はどんな種より小さいのですが、蒔くと成長してどんな野菜よりも大きくなり、葉の陰に空の鳥が巣を作れるほど大きな枝を張ると、主イエスは仰いました。大阪教区が担当の時、日本聖公会婦人会がどのような枝を張るか楽しみにしましょう。きっと私たちを驚かせてくれるような、チャレンジした者にしか与えられない喜びがあると信じて歩み出します。重ねて皆様の篤きお祈りをよろしくお願い致します。

日本聖公会婦人会にはすばらしいお祈りがあります。「神さまと共に」です。このお祈りを大切に、全国の皆様も、共に祈りつつ、歩み出しましょう。

主なる神さま

日本聖公会の婦人たちを　いつくしみのうちに　歩ませてくださることを感謝いたします。

私たちが、神さまからの賜物を生かし、謙遜な心と愛をもって、すべての人々に福音を伝え、まことの平和をつくり出すために、主のみわざに与らせてください。

この世のものみな　喜びにあふれ、主を賛える日のきますように。

主イエス・キリストによってお願いいたします　　アーメン

ごあいさつ

日本聖公会婦人会　会長　ハンナ　井上　惠美子

昨年の 6 月、第 26（定期）総会において大阪教区が会長選出教区となり、会長を含め 6 人で日本聖公会婦人会の役員を担い半年が過ぎました。以前に教区婦人会会長を務めたこともあり、婦人会についてはなんとなく知っているつもりでおりました。この「なんとなく」というのは「ほぼ分かってない」に等しいと知るのは任命を受けてすぐのことです。

『息吹きをうけて』第 1 集を皆さんお持ちでしょうか。もう在庫は無いのでお持ちでない方はどなたかに譲って頂き、是非目を通して頂きたく思います。これには日本聖公会婦人会の現在に至る歴史が淡々とそして詳しく書かれています。当時の時代背景を想像しながら重ね合わせていくのですが、その時の社会の動きに合わせて婦人会、当時は補助会でしたが、働きの方向を変化させつつ歩んで来られたと思います。

さて、今の私たちの環境はとても便利に様変わりしました。掌に載せたスマホの画面をちょいちょいと触れるだけで、世界中の人とすぐにやり取りが出来ます。通信手段だけではなく身の回りのいろんなことが変化しました。この変化を見据え、私たち日本聖公会婦人会の働きを次へ繋いでいくためにも模索しつつ、み声を頼りに進んでいきたいと思います。

2019 年度　被献日献金活用実施報告

被献日献金から学びの支援をさせていただいた方々の報告をお届けいたします。今年度の申請をご検討される方々のご参考になればと思います。

《　神学生枠　》

聖公会神学院　特別聴講生
スザンナ　中村（なかむら）　真希（まき）（東京教区）

このたびは皆さまのお心遣いに改めて感謝申し上げます。いただいた被献日献金は、専門分野である聖書学の研究書と、神学院での授業に必要な神学の基礎文献のために用いさせていただきました。神学院で改めて聖公会の神学を学びなおす中で、多様な価値観と目まぐるしい変化、多くの情報に満ちた現代社会にあって、教会が果たしていく役割や方向性について考えさせられました。これからの時代に多様性において一致を求め、時代に合わせて変化を恐れない聖公会の神学はますます重要なものとなっていくと思います。同時に、聖書の御言葉という土台にしっかりと立って歩んでゆくことの大切さも改めて実感しています。４月からは教会の現場に出て行きますが、ここでの学びを糧に、またこれからも神学し続けることを忘れずに歩んでまいりたいと思います。本当にありがとうございました。日本聖公会婦人会の皆さまの働きにますますの祝福をお祈りいたします。

ウイリアムス神学館　３年
ウリエル　仲宗根（なかそね）　遼祐（りょうすけ）（沖縄教区）

この度は被献日献金活用にて、ご支援して頂きありがとうございます。皆様のご支援により、『イエス・キリストのユダヤ民族史 1～5 巻』を購入することが出来、神学校での勉強の助けとなっています。イエスの生きた時代、当時のユダヤ民族がどのような生活をし、どんな信仰を持っていたか、またその時代の社会状況、時代背景につきましてもご支援により購入した書籍を読むことで沢山の事を学ぶことが出来ました。聖書を読む上で、やはりイエスが宣教を広めた時代の事を知る事はイエスが何のために来られ、どのような人々がイエスを信じたか、最初期のキリスト教信仰を知り学ぶことで、現代に生きる私達の信仰をより深める助けになると、私は考えています。その学びを進めていく中で、今回皆様からのご支援で

購入させていただいた書籍は、これからも私に力を与えてくださると感じます。良き学びを進める機会を与えてくださったこと、心から感謝しています。

聖公会神学院　３年
ウィリアムズ　藤田（ふじた）　誠（まこと）（東京教区）

昨年に引き続き、被献日献金活用申請ご承認頂きましたこと、感謝申し上げます。今年度は授業で使用するテキストと総合試験へ向けた勉強のために申請させて頂きました。『ヘブライ語聖書』Biblia Hebraica Stuttgartensia、P. エイヴィス『教会の働きと宣教』聖公会出版、L. ニュービギン『日本キリスト教史』日本キリスト教団出版局、『Common Worship Pastoral Service』Church House Publishing、V. ヘネップ『通過儀礼』岩波書店、J. ゴンザレス『キリスト教史上下』新教出版社、などです。キリスト教関連本は文庫サイズでも千円以上するものが多く、資料を調べる際には図書館に頼ることが多くなります。

このように婦人会の皆さまと多くの方々のご厚意によって書籍購入の機会を与えて下さいますこと、本当に感謝です。これらの本を通して、主が私たちに語られるメッセージを受け取れますよう大切に読ませて頂きます。神学院３年間を通したご支援ありがとうございました。

聖公会神学院　３年
マグダラのマリヤ　島（しま）　優子（ゆうこ）（九州教区）

３年間にわたり、被献日の尊いお献げものからご支援をいただき、たくさんの書籍を購入させていただきました。授業で使用するテキスト、一生重宝するであろう事典類、語学関連の本など、さまざまな角度から神学を学ぶ上で基礎的な知識を得るために不可欠な本が中心でした。３年目は特に、ボンヘッファー著『説教と牧会』など、将来の説教準備に役立つ本を７冊購入させていただきました。神学に限らずどの分野でも言えることですが、学問の奥深さは無限大であり、神学院での学びが終わろうとしている今、やっとその入り口に立ったような感覚すら覚えます。今後は教会現場で実際に働きながら学びは継続していきますが、婦人会・女性の会の皆さまの温かいお心に感謝しつつ、自らの研鑽のために、いただいた本をさらに活用してまいります。

聖公会神学院　３年
ヒルダ　藤田（ふじた）　美土里（みどり）（東京教区）

主の平和を祈ります。今年で３回目の申請となります。神学院３年間のお支えに感謝いたします。この関わりを通し婦人会のお働きを身近に知り、女性たちが教会を支えてきた歴史に関心を持ちました。１９世紀末、来日した英米の宣教師たちの働きは、海外伝道へ向けた女性たちの情熱が支えていました。宣教師の働きも、長期間多くの女性の宣教師を送った宣教団の働きも、大きく支えたのは女性たちであったことを今年度は調べました。その時代背景、女性たちの行動、一人一人の人生の歩みが大きな流れとなって今の私たちの道を作り出していることを知りました。そして、それが今も受け継がれていることを。婦人会の働きも宣教師の女性たちとの交わりと共に多くの先人たちの祈りと愛が込められていることを知りました。

その働きによって創りだされた「シスターフット」というネットワークが女性たちのエンパワーメントの源でした。卒業後も「シスターフット」の交わりを通してよろしくお願いいたします。

聖公会神学院　２年
エリサベト　三浦（みうら）　千晴（ちはる）（北海道教区）

主のみ名を賛美いたします。
日本聖公会婦人会の皆様

いつも祈りのうちに覚えていただいておりますこと、また多方面にわたるお支えをいただいておりますこと、心より感謝いたしております。

2019 年度の被献日献金により、神学院の授業で使用する文献と、新約聖書を釈義するために使う文献を購入させていただきました。皆様の尊いお献げによりご支援いただいておりますこと、心より感謝申し上げます。

２年次になりますと、与えられた課題をこなすということよりも、自分で考え、調べ、それをまとめ、文章に表すという学びが増えたように思います。ご購入いただいた文献を使用しながら、日々与えられた課題に取り組んでおります。このことがいつか神様からのみ言葉を皆様にお伝えするご用につながっていくことを、切に願い求めております。

✝ ウイリアムス神学館　1 年
ダビデ　佐藤（さとう）　充（みつる）（九州教区）

2019 年４月にウイリアムス神学館に入学し、初めて書籍の補助を頂きました。今回、私は「J バイブル」という、パソコンで使用する、注釈付きの聖書ソフトを購入して頂きました。これを使用すると、パソコン上で日本語、英語の各訳の聖書の比較が一度にできます。また、付随するヘブル語版とギリシャ語版もつけて頂いたので、新・旧約聖書をそれぞれの原語で、意味や品詞等を確認しながら見る事が出来ます。

以前は、各訳の聖書や辞書を６冊も７冊も広げなくてはなりませんでした。しかし、この『J バイブル』を使用すると、各訳の聖書が一度に開け、すぐに本題に入ることが出来ます。

まだギリシャ語は学び始めたばかりですが、これを使用することで、聖書の原語での意味をスムーズに見る事が出来ました。今後、聖書の釈義や説教論など、より聖書を深く学んでいきます。これからも、さらに活用し、学びを深めていきたいと思います。ありがとうございました。

《　教区婦人会枠　》

北海道教区婦人会

前年度会長　津川　朋子

2019 年は、９月３日、４日行われた北海道教区婦人会第 38（定期）総会の為、被献日献金活用（教区婦人会枠）を用いさせていただきました。

第１日目は、各報告、議案審議が行われ、夕食後のプログラムでは、東京教区聖マーガレット教会信徒植松 功氏による「歌・祈り・黙想」の時間を持ち、静かな心豊かな祈りの時間を持つことが出来ました。

第２日目は、日本キリスト教海外医療協力会の派遣ワーカー岩本直美さんの講演が行われました。バングラデシュのラルシュ共同体コア・メンバーで、重い障碍を負った人々に寄り添う 25 年にわたってのお働きから語ってくださり、ヒンズー教徒、イスラム教徒、キリスト者が共に生きている福音の物語を分かち合いました。

被献日献金活用枠を受け、貴重なお話を伺い、２日間恵み深い時間を過ごすことが出来たことを感謝いたします。

東北教区婦人会

会長　赤坂　康子

感謝箱献金をより身近に思えることの必要性を感じ、実際に活動している方の話をお聞きしたいと、仙台基督教会婦人会（会長　梅津庸子姉）では日聖婦役員会に相談。3 月にバングラデシュから帰国されていました上澤伸子さんからのリグリマ・ジャパンの活動報告会を開催することができました。

報告会でのお茶を飲みながら質疑応答

永井眞由美運営委員長のわかり易い感謝箱献金についての説明の後に、ガロの女性の民族衣装を着ての上澤伸子さんのお話を伺いました。日本のリグリマの運営委員は「素早く大きな進歩より、地道で確実な一歩を」をモットーに、それぞれの立場に応じて活動しているそうです。

10 年前から始められた感謝箱献金による支援は、①裁縫トレーニング（リグリマ製品の製作、服の仕立て、独立開業）、②改良かまどの設置（ガス、水道の設備はありません。このかまどは排気ができ、燃料の節約、火口が２つあるので料理の時短になり、また煤（すす）で服を汚すことが少なくなった）、③池の再生（養魚を行う池の池底にたまる泥の掘削が大変高額で、その掘削費用）に用いられています。

7 月 14 日（日）午後の礼拝後に開催しましたので婦人会以外の方々の参加もあり、婦人会の感謝箱献金に関心を向けて頂いたことは大変嬉しいことでした。他のコアのスタッフもいらしていただき、リグリマやサイディア・フラハの手工芸品、アルディ・ナ・ウペポ紅茶の販売もあり盛況でした。被献日献金活用（教区婦人会枠）で 4 万円の支援を受けました。ありがとうございました。（東北教区役員会だより第 3 号より一部抜粋）

北関東教区婦人会

「女性の心に恵みの灯をともした被献日献金」

会長　板橋　和子

主のみ名を賛美いたします。

この度も被献日献金活用資金のご支援をありがとうございます。北関東教区婦人会は、教区主催「信徒・教役者の集い」の女性参加費補助を被献日献金活用の援助にお頼りしているので、今回も参加者 120 名中過半数を女性が占めました。

会の２日目は、カトリック教会の晴佐久昌英（はれさくまさひで）神父が“世界を救う「福音家族」～「一緒ごはん」で教会再生 ～”と題した講演で、「食べ物を分かちあうイエス様の姿に原点がある」と任地での経験をお話しくださいました。困難な状況に置かれた若者に司祭館で食事を準備し、みんなで一緒にご飯を食べることで教会が元気になる。失敗しても続けると楽しくなると励ましをいただきました。

晴佐久神父にお会いし、お話しを聴くために集まった女性の満足した顔で、被献日献金活用が活かされたと感謝しました。ところがそれだけでは終わらなかったのです。

それから４ヶ月半も過ぎた２月３日、教区婦人会総会に出席した会員から「私はこれまで会員ではなかったが、会員以外の女性にも補助金が頂ける婦人会の活動に感動し会員になりました」。なんと嬉しい言葉でしょう。婦人会の働きが小さな希望の灯をともしたのです。

ことばこそ発しませんでしたが、お祈りと共にお献げくださった全ての方々と婦人会皆様のお働きに感謝を捧げる感動のひとときでした。

横浜教区婦人会

会長　須賀　道子

今年度の被献日献金は横浜教区婦人会大会に活用いたしました。

大会は１泊２日でバリアフリーの整った大磯のホテルを会場とし、100 名以上の参加者が集まりました。

エリザベス・サンダース・ホーム施設長の「ホームの子どもたち　現状と卒所の進路やサポート」のお話で、子供達の数は減っているのに施設を必要とする子供達は増えて虐待の件数も増えている。卒所の後は子供達に寄り添って支援していると重みのある貴重なお話しでした。

大会後、希望者はリニューアルした澤田記念館を見学しました。大会の信施は公益財団法人エリザベス・サンダース・ホームと澤田記念館へお献げ致しました。

中部教区婦人会

「 長野伝道区　女性の集い 」

会長　長井　登茂子

７月２１日、長野伝道区主催「女性の集い」が松本聖十字教会にて行われました。

YWCA の西原美香子（にしはらみかこ）さんを講師にお招きし、「女性の活躍の場と教会の宣教、YWCA の働きから」の演題でご講演を頂きました。男性 10 名、女性 20 名の計 30 名の皆さんで、合同礼拝の後の午後の学びの時を持ちました。

始めに、YWCA の礎（いしずえ）をお聴きしました。女性の自立を目指して日本でも、女性が自分の言葉で発信したり、労働環境を考えたりする場として活動が広がりゆき、時代の流れと共にその活動は、平和への願いが込められた人権運動に変遷してきたとのことでした。そこには、神様の見守りの中で、多様な人々が共に祈り合える場として、教会と YWCA の大きな支えがあることを改めて心しました。

また、このことを実際に感じられる時間を頂きました。４つのグループに分かれて、課題「ストローのタワーを作る」を体験しました。タワーを作る目的が「盛り上がること」であることは極秘として言葉にされないまま、皆さん、高さを競い合う作業かと思い、案を出し合い、協力し合うことに夢中でした。後でタワーを作る目的を言葉で知らされて、言葉で発信することの重要性を体得できました。

和やかな雰囲気で、参加者同士がコミュニケーションしながら、楽しく学び合うことができた貴重な時間となり、あっという間の２時間でした。

YWCA の西原美香子さん、暑い中、ご講演、本当にありがとうございました。

大阪教区婦人会

会長　山村　小夜子

大阪教区婦人会は、年間行事の一環として 10 月に秋の修養会を開催しております。

2019 年 10 月 18 日（金曜日・福音記者聖ルカ日）午後 1 時より尼崎聖ステパノ教会におきまして、講師に片柳弘史神父（イエズス会司祭、カトリック宇部教会主任司祭）をお招きして、熱のこもったお話を拝聴することができました。

テーマは、「世界で一番大切なあなたへ マザーテレサに学ぶ神さまの愛」でした。片柳神父は自らインドへとまっしぐらに進まれて、カルカッタでボランティア活動を行われ、マザーテレサから神父になるように勧められ、ご自身の強い願いを実現されました。修養会当日は、深い愛に関わる数々のお話を熱弁され、聴衆はとても感銘を受けることができました。最後に、祈りの歌「わたしをお使いください」を皆で斉唱し、多くの方が心ひとつとなり、大変有意義な会を持つことができました。

講演後は、お茶席を設けたり、バザーの開催もできました。当日の参加者は 133 名（内教役者 5 名・男性 6 名）で、席上献金は熊本 YMCA の震災復興活動への協力資金のために、お献げいたしました。又、台風 19 号の被災者への災害義援金も募り送金いたしました。

被献日献金（教区婦人会枠）として 6 万円の交付を受け、準備金などに活用させていただきました。感謝いたします。

《　有志グループ枠　》

新札幌聖ニコラス教会マリア会（北海道教区）

「北海道教区道央分区被献日礼拝」

代表　安井　直美

2019 年２月２日、新札幌聖ニコラス教会にて、北海道教区道央分区被献日礼拝が行われた後、向谷地生良（むかいやちいくよし）先生とべてるの家のスタッフ２名をお招きし、講演会を行いました。参加者は 82 名でした。

新札幌聖ニコラス教会マリア会（婦人会）の例会では、これまで向谷地先生の著書『精神障害と教会』を読み、学びあってきました。今回の被献日礼拝の折に、道央分区婦人会の皆様と、これからの教会生活を考えるきっかけになればと思い、「精神障害と教会～教会が教会であるために～」と題して講演会を企画しました。講師の向谷地先生は、1984 年に精神障害等を抱えた当事者の地域活動の拠点として浦河にべてるの家を発足させた方で、講演では、これまでの歩みと共同体のあり方について語られました。スタッフの方からは、日々の

生活の苦労話などを聞かせていただきました。お二人のお話は、とても穏やかで、ユーモアにあふれ、会場が暖かい雰囲気に包まれました。貴重なお話を聞かせていただき、学ばせていただきましたことを、これからの生活に活かしていこうと気持ちを新たにいたしました。

講演後に、支援のためにべてるの家の商品を販売いたしました。

被献日献金を活用させていただき、心から感謝申し上げます。

深川聖三一教会婦人会（北海道教区）

佐々木　静

私たちの教会のある地域は、北海道でも人口の少ない、周囲は水田に囲まれた農村地帯です。教会の信徒の数は少ないですが、過去には立派な信徒さんが育っていった由緒ある教会です。この度は貴重な被献日献金を活用させて頂き、ありがとうございました。

月１回の婦人会の学びのために『私の信仰』アンゲラ・メルケル著作の本を購入させて頂きました。皆様ご存知のとおり、アンゲラ・メルケルさんは東独で牧師の娘として成育され、2005 年以来ドイツの首相として務め、福島原発事故以後ドイツでの原発の撤退を決め、また難民危機に際しては、積極的な受け入れを指示するなど、いまのドイツに大きな影響を及ぼしている人物です。これは私たちの教会の司祭様のお薦めの本です。

まだ始めたばかりですが、時代背景、むずかしいところ等は司祭様が丁寧にわかりやすく解説してくださり、楽しく学ぶことが出来ています。婦人会の人数は 10 名以下の集まりのことがほとんどですが、会話がはずみ、なごやかな中で学びの時間を持つことができています。

ところで近年は天候不順、災害など予測のつかない出来事が多く、私たちの生活は不安に満ちています。しかし、どんな時にも祈り、主の御用のために私たちひとりひとりが平和を創り出すことが出来るよう歩んでいきたいと思います。

奈良基督教会婦人会（京都教区）

「 石原絹子司祭　講演会 」

樫田　博子

10 月 13 日（日）の婦人会例会は、石原絹子沖縄教区退職司祭をお迎えして講演会を行いました。教会内の男性はもちろん、他教会からもたくさん来て下さり 70 名近くの会になりました。

太平洋戦争末期、7 歳の石原先生はアメリカ軍の沖縄上陸による地上戦に巻き込まれ、ご家族 6 人のうち 5 人を失われ、先生ただ一人生き残り生き抜いて来られました。キリストに出会い、沖縄教区初めての女性司祭になられた先生は、80 歳を越えた今も戦争体験の語り部として平和のための活動を続けておられます。

事前に先生の著書『沖縄戦を語り継ぐ』を読んで何がこの少女に起こったかを知っていたはずなのに、先生の生々しく迫力ある話に震えました。米軍の激しい攻撃の中、日本軍は住民を守るどころか迫害し、南へ南へ追い詰められて南端の地は住民と日本兵のむごたらしい死体でうめつくされたのです。その中で気を失った少女を救ったのは米衛生兵、そして収容所に祖母が迎えに来て、少女は生還したのです。

本土を守るための時間稼ぎの盾となった沖縄、戦争体験者から直に話を聴く機会はどんどん少なくなっています。若い人に聴いてもらわねばと思います。

沖縄から先生をお招きすることは経費の上でも一婦人会では大きな決断でしたが、被献日献金の活用を認めてお支え頂きましたことを心より感謝いたします。

編集後記

「ニュースレター　No. 70」をお届けいたします。原稿をお寄せいただきました皆様に感謝申し上げます。

寒さ厳しき折、いかがお過ごしでしょうか。今年の冬は、色々な型のインフルエンザが流行っており、体調を崩されておられる方も多いかと思います。大斎節に入りましたが、春の訪れと共に、心豊かにイースターをお迎えしたいと思います。

今年 1 月 17 日に阪神・淡路大震災から 25 年目を迎え、3 月 11 日には東日本大震災から 9 年目を迎えます。多くの尊い命が奪われ、甚大な被害がもたらされたことを、これからも心に留め、被災者・被災地を覚えて祈り続けることを大切にしたいと思います。

（書記　山本久美）